伊東市史だより

第13号
平成27年3月26日

写真上：汲水を頭上運搬する川奈の女たち
右側の石垣と背後の山、左の海老網などから川奈東町の若い女たちの朝の姿を写した貴重な写真である（写真提供：西島保）。

写真右：明治末年の川奈港
湊には洋式帆船が停泊し、正面の崖地に旧内務省の石丁場が見えている。撮影者不詳だが、撮影時期は裏面のメモ書きから二葉とも明治38年2月（写真提供：西島保）。

【特集】『伊東の自然と災害』・『伊東市史 史料編 近現代Ⅰ』が完成！

待望の『伊東の自然と災害』と『伊東市史 史料編 近現代Ⅰ』の二冊が完成しました。

『伊東の自然と災害』は伊東の自然条件への解説と災害史に関する通史がまとめられています。古代から現代までの間に伊東市民が経験してきた飢饉・地震・津波・大火などの歴史をわかりやすく解説しています。

災害に焦点を絞った内容で一冊を作成するのは、自治体史としてはたいへん珍しい試みです。これからのまちづくりを考えるうえで基本となる経験がたくさん記されています。

また、伊東の明治大正年間の先人たちが残したさまざまな史料を一冊にまとめた『伊東市史 史料編 近現代Ⅰ』も刊行しました。伊東・宇佐美・小室・対島の各地区のルーツをたどる基本図書です。今回の「市史だよ

り」では、右の二書の執筆と編集に御努力いただいた先生方から、所感やおすすめの言葉を寄せていただきました。

『伊東の自然と災害』を手にとってください

笹本正治
伊東市史自然災害部会長・信州大学教授

平成二十五年三月十日に刊行した『伊東の自然と災害　伊東市史別編』は、誇るに足る本だと思っています（左写真参照）。

完成した『伊東の自然と災害』

災害体験と市民の生活

私は長野県に住んでいます。昨年、長野県は多くの災害に見舞われました。七月九日には木曽郡南木曽町読書で土石流が発生し、家にいた四名が流され一人が死亡。全壊家屋十戸、ＪＲ中央線の橋梁も流失し、国道一九号にも土砂が流入しました。観光業は大打撃です。

九月二十七日には御嶽山が噴火。死者五七、行方不明六名という大惨事となりました。平成三年の雲仙・普賢岳大火砕流を上回る、戦後最悪の火山災害です。

さらに十一月二十二日には北安曇郡白馬村を震源とするマグニチュード6・7、最大震度6弱の長野県北部地震が襲いました。先日、私は白馬村を訪れましたが、崩壊した家々が雪に埋もれていました。よくぞこれだけの被害のなか死者が出なかったと、奇跡を感じました。

被害の最も大きかった堀之内地区では避難場所に指定されていた公民館が惨憺たる状況でした。この地域は大変に防災意識の高い場所だったので、公民館がだめだとわかるとすぐに避難所を決め、誰がいないかを確認して、みんなで来ていない人の助けに向かったといいます。日常的な防災意識と、人々のつながりが、死傷者を出さなかった最大の要因です。翻って私たちはどうでしょうか。本当に防災意識を持っているでしょうか。

体験を大切にして後世へ

災害がいつどんな形で降りかかるかわからないということを、私はこのところ様々な形で実感しています。だからこそ、過去を振り返り、日常的に防災意識を持つ必要があるのです。

大正12年9月の関東大震災で津波被害を受けた玖須美のようす（黒田益之氏所蔵アルバムから）

平成八年に『静岡県史　別編二　自然災害誌』が出て、さすがは防災に尽力する静岡県だと思いました。その後、市史としては最初に伊東市が自然災害編を刊行しました。この『伊東の自然と災害』では、県史より遙かにきめ細かい内容をこめています。

普通の市町村史類は分厚く、ハードカバーの重いものが多いのですが、本書は四三六頁もありながら、ソフトカバーで、厚さを感じさせません。記載も写真や図版を多用し、少しでも市民の皆さんに読んでいただけるように努力しました。本書から先祖たちの災害体験を学ぶことが防災の一助になりますので、これだけの頁数でありながら頒価二〇〇〇円という、一般書と比べても特別な安価で提供しています。

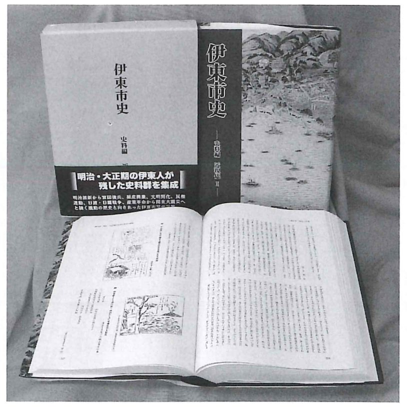
執筆陣は日本の中でも優れた人たちですが、地元の先生たちと見事な連携の上にまとめることができたと自負しています。たとえば、自然の部分を担当している地元静岡大学の小山真人教授は火山の専門家で、富士山研究の第一人者です。津波について書いてくれた東北大学の今村文彦教授は、おそらくテレビなどで見た人も多いと思いますが、日本の津波研究の最先端で活躍している方です。

『伊東の自然と災害』は、市民に日常的に持っていただきたい防災意識醸成の成果です。災害に際しては、自分の身を自分で守らなくてはなりません。そのためには過去の事実を認識し、現状を把握して、行動する必要があります。

伊東市の歴史は豊かです。〝自然と災害〟と聞くとマイナスイメージをお持ちの方があるかもしれませんが、それに対応するのも文化であり、歴史です。私たち伊東の歴史を知ることは、市民として生きるときに、大きな道しるべになります。改めて『伊東の自然と災害』を読むことをお奨めし、引き続き伊東市史編さんに皆さまのご支援ご協力をお願いいたします。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

完成！『伊東市史　史料編　近現代Ⅰ』



伊東市には、幸いなことに明治以降の史料が比較的良く保存されています。明治の伊東人が残した貴重な文書をまとめていただいた三人の先生方から、印象に残ったことを御紹介いただきます。

市史編さんに携わる

小宮一夫
伊東市史専門委員・駒澤大学文学部非常勤講師

私はあるご縁で市史編さん事業に携わることになりました。

地域を活性化するのは「若者」、「ばか者」、「よそ者」だとしばしば言われます。私は「よそ者」の視点から伊東の近現代に光を当て、その魅力を見いだすことに努めました。

伊東には、小室村文書や湯川区有文書などの行政文書の他、個人のお宅や漁協、企業などにも文書が残されていました。さらに市役所の地下にも伊東村・伊東町時代の議案綴りや議事録などの議会関係史料が大量に残されており、今回利用することができました。膨大な史料を読み込むうちに、絶対に良い史料集ができるという思いが次第に強くなっていきました。

こうして、明治から大正末年に至る史料を分野別・テーマ別に精選した『伊東市史　史料編　近現代Ⅰ』が完成しました。

第一章は「政治と行政」

第一章の一〜三節では、明治から大正末年にかけての伊東地域が直面した政治問題に関する史料や行政機構の整備・拡大に関する史料を載せました。

近代的地方制度である町村制や郡制が公布・施行されるなか、伊東地域の村々にとって、もっとも重大な関心事は賀茂郡から田方郡への管轄替でした（『伊東市史 史料編 近現代Ⅰ』掲載史料番号54～58、以下同じ）。

また、史料を見るうちに重要性に気づかされたのは、大正三（一九一四）年に廃止された伊東警察分署の復活問題です（史料80～85）。伊東の地域社会にとって警察の規模は、住民の安全に直結する問題と捉えられていました。

大正14年9月開通直後の熱海伊東間の自動車道遠景（木下李太郎館旧蔵太田家資料）

政治が果たす役割のひとつに、公共事業によるインフラ整備があります。四節と五節では、道路工事などの土木行政、水道敷設に関する史料を載せました。四節からは、行政が地域と一体となって道路という社会基盤の整備にまい進していくさまが見てとれます。

第三章は「産業・経済」

本章に掲載された明治から大正期にかけての伊東の産業・経済に関する史料では、漁業と関連するものが目につきます。例えば、魚肥の製造販売や製氷についてのものです（史料292・293、325）。漁獲物を田畑の肥料にすることは江戸時代以来、たいへん重要な位置を占め、地域経済を支えているしくみのひとつでした。

また、伊東でも、二〇世紀になると、水力発電が計画されていきます。三節からは、明治末年から大正にかけて、伊東で電柱や電灯が整備されていく様子が見て取れます。

第四章で「交通・通信」

第二次大戦後の高度経済成長期に自動車が普及するまで、地域社会に果たす鉄道の役割は極めて大きなものでした。陸路が険しい伊豆半島では、明治後期から大正期にかけて伊豆循環鉄道の敷設を官民一体となって、政府や帝国議会に働きかけていきます。一節では、これに関する史料と未完に終わった民間による伊豆半島に鉄道を敷設する計画と併せて掲載しました。

また、伊東の交通の歴史を考えるうえで、海運は欠かせません。これらの史料は三節に載せました。

郵便・電信・電話を扱った四節では、漁業取引の利便を図るため、小室村から電信事務を取り扱う電信受取所の設置を願い出たことが注目されます（史料371・372）。通信技術の発達が伊東地域の漁業の発展とどのように関わったかを調べてみるのも良いかもしれません。

『伊東市史 史料編 近現代Ⅰ』には、これまで地元ではほとんど知られてこなかった史料が多数掲載されています。本書を手に、明治・大正の伊東に思いを馳せていただければ幸いです。

加藤清志
伊東市史編さん委員・伊東市文化財審議委員長

明治の伊東は水産・農・林業が基幹

江戸東京の大消費地を控えた伊豆東海岸は、江戸時代中期以降は、江戸への物資供給地として栄えて来ました。その最大移出物資は水産物で、次いで薪や木炭などの林産物でした。

明治の中頃までは、この傾向はゆるぎなく続き、明治中期に出版された『静岡県水産誌』でも、県下の水産物の七割近くを伊豆が占めています。

養蚕・果樹など新しい農業も

水田の少ない伊東では、明治

の新時代を迎えて米麦以外の多様な商品作物を手がけるように尽力した先覚者たちも目につきます。

「池村の茶の出荷状況」「小室村の葉タバコの耕作」「小室村の柑橘調査」などの史料に、その一端を見ることが出来ます（『伊東市史 史料編 近現代Ⅰ』一三四頁参照以下同じ）。

村境の線引きが後遺症に

明治新政府は、財政の基礎を「地租」に置くべく、すべての土地の所有者確認を急ぎました。陸地については従来の所有権を認めて確認後に、個人または村に地租を負担させました。所有の明確でない土地は、すべて国有地とする方針だったので、複数の村の入会地（共有地）として村境を明確にして来なかった地域は、大急ぎで境界を決めました。ところが、双方の理解に食い違いがあって、後になって村境をめぐる争いが各地で頻発したのです（一三〇頁参照）。

大室山は池区のものだが住所は富戸

大室山リフトの住所をみると富戸〇〇とあります。大室山は池区のもので、区長がリフトの社長です。それなのに、リフトの場所が富戸地番になっているのは不思議です。その理由は、明治初期の村境の決定までさかのぼります。八幡野や池から富戸や十足に至る広い原野は、四ケ村の入会地で明確な境は無かったのです。急には決められないので、名目だけ富戸村にして富戸〇〇番地として役所へ届け、後で四ケ村協議して円満に分割しようとしました。うまく分割できたが、富戸〇〇番地という地番を変えることは出来なかったという事情です。

明治以降「海は国のもの」

明治八年に、新井村が「ぜひ新井村から税金を納めさせて下さい」と、当時の県知事にあたる柏木忠俊に願い出ています（一八〇頁参照）。

「減税願い」はたくさんあるが「私から税金を取り立てて欲しい」という願いは異常に見えます。しかし、海は全部国有という事態の中で「税金を納めている」という事実をつくれば「権利」が発生すると考えた庶民の知恵です。この嘆願は結果的に「海は国有だが、従来持って来た利用権（漁業権）は、そのまま認める」という原則が示されて落着しました。

ブリの大漁に恵まれた玖須美浜から新井地区の遠景（杉山英二氏所蔵写真）

次々と出る新政府の法令や告示を、新井村の篤志家が丹念に書き留めた史料も収録できました（一七八頁史料203参照）。

新井のブリが日本橋魚市場を賑わす

明治大正期、新井沖の定置網で一夜に数万匹のブリが獲れて日本橋の魚問屋を喜ばせています。と言っても、にわかには信じがたいでしょうが、それを示すのは本書の口絵6口絵7の写真です。ブリ大漁の記念碑で、日本橋の魚問屋も名を連ねるので、東京の商人たちも大漁の恩恵に浴したのです。この碑は、今も新井の海岸に二基が並んでいます。明治人の躍動をみる思いです。

加藤好一
伊東市史専門委員・元琉球大学教授

医療費の無料化・明治版

大正六～八年にかけての小室村の死産率は約九％です。明治二十五～二十九年が一三％ですから、二十五年間で四％の減少（『伊東市史 史料編 近現代Ⅰ』五三一頁参照、以下同じ）。医療・防疫に力を尽くした結果でした。

そうしたなか、明治三十六年の伊東村会は、伊東療病院への補助金を出して村民の診察料・往診料などは全て無料化することとしました。日露戦争の前年、戦費負担と重税に苦しむ村民にとって、どんなにありがたかったことでしょうか（五三八頁）。

第五章の社会・災害では、こうした医療福祉の状況と取り組みに加え、様々な災害と闘って伊東地域の町や村の生活がどう変化・発展したか、その中で人々がどんな生活を営んだかをリアルに紹介したいと考えました。

宇佐美小児童が描いた震災マンガ（右挿絵）は、生活への漫画の普及度が分かって興味深い（五一七頁）ものです。

大正十二年の新聞『伊東時報』には活動写真の広告が大きく載り、当時の伊東への映画の広がりを示しています（六三二頁）。

染物屋さんと福沢諭吉

第六章 教育・文化・宗教の第一節では、韮山中学へ我が子を入学させた母親による明治二十年代の手紙に着目しました（五七〇頁）。カタカナ主体のたどたどしい文ですが、すでに口語体となっています。二葉亭四迷の口語体小説『浮雲』の出版は明治二十年ですが、この母親は息子への口上として書く中で独自の口語体を習得しています。

二節冒頭では、文明開化が進む明治十年に伊東・湯川村に移入された約七〇〇冊の書名を紹介しました。最多は福沢諭吉著『学問のすゝめ』で、移入は八回を数えます。その読後感を本の裏表紙に走り書きしたのが、湯川村の染物屋さん山田清太郎です。「この本を読むと知恵が増し、商取引などで触発される」というのが職業人である彼の受け止め方でした（六一七頁）。

やがて大正七年になると伊東女塾が開かれ、実科女学校や伊東高等女学校創立に続く女子教育の流れが強まっていきます。

伊東とつながる戦争

一方、近現代の伊東は戦争と深く関わりながらすすみます。

後のことですが、昭和十二年の日中戦争から太平洋戦争終結までの約八年間に、伊東市ではおよそ一一六五名の戦没者を出しました（昭和四十四年 福祉事務所集計）。明治二十七・八年の日清戦争では五名でしたから五〇年間に二三三倍の激増です。

その基盤となった「国民皆兵」のしくみはどう作られたか。第八章 兵事・戦争では明治九年に徴兵された宇佐美村の萩坂太三郎の事例をはじめに紹介し、日清・日露の戦争、第一次大戦に動員された兵士や地域の人々の姿を追いました。

日露戦争時には、村を挙げての凱旋兵士の歓迎・小学生による送迎や遺骨出迎えが盛んに行われる一方、伊東村では非戦演説会も開かれました（七二五頁）。

大正期は戦没者こそ少なかったものの、徴兵制度が完備して昭和へつながっていきました（七五一頁）。戦争は、昭和期にいよいよ激化して、伊東も大きく戦時下に組み込まれますが、その状況は次の『伊東市史 史料編 近現代Ⅱ』でたどりたいと思います。

宇佐美小学校児童の関東大震災作文集に載る挿絵

市民の声

伊東市史講座「伊東の近代を資料でたどる」を受講して

坂部正樹
八幡野在住・元教員

『伊東市史 史料編 近現代Ⅰ』を読みました。

私の故郷は城下町で、仕事の関係から伊東へ移り住んで数十年を過ごしました。城下町では、今につながる街の成り立ちは意外にわかりやすいのですが、伊豆は漁村・山村というイメージで成り立ちがわかりにくい印象です。

地域の子どもたちの姿を通して、この地に住んだ先輩たちの昔の暮らしに興味がありましたが、特に私が興味を持ったのは「池」という地区です。今の池地区の姿がいつ頃成立したのか。地域の人に尋ねるなどして人々の労苦は、うすうす感じていました。しかし、今回の史料編に活字化されたさまざまな「嘆願書」や「決議書」などの史料に触れて、長い積み重ねがいっそう実感できました。

池の用水に限らず、平地の少ない伊豆で、人々はどのように暮らしてきたのか、どんな苦労をしてふるさとを作り上げてきたのか、実感を伴いながら少しずつわかってきた気がします。また、不思議とわかるごとに伊豆半島のよさが理解され、伊豆に暮らすことに誇りが持てるようになっています。史料を読み解いてくれた古文書研究会の諸兄諸姉に感謝申し上げます。

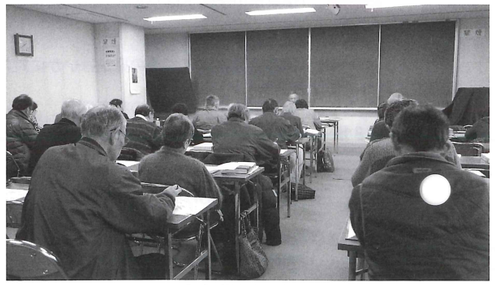
市史に使った実物の史・資料を見ることができる資料館があれば子どもたちも伊豆のくらしを実感できる機会をもつことができることと思います。

遠山敬二
大室高原在住・伊東自然歴史案内人会

昨冬、市史講座を受講しました。

初日の小宮一夫先生のお話は明治初期の末端の行政組織としての戸長の役割、合村の話、また、官吏の勤務時間の話など、とても興味深いものでした。

今の伊東市が最終的にできたのは宇佐美村と対島村が編入された昭和三十年ですが、明治四十年の史料によれば、前年成立の伊東町に小室村と宇佐美村を加えて新たな伊東町を置く件が論議されていたことや、官吏の勤務時間は農繁期や農閑期で違うことなど、今では考えられないことも見えています。単に、事実が書いてあるだけではなく、当時の時代背景や人々の生活が垣間見られて、史料の面白さ、重要さを感じました。



市史講演会の様子

加藤好一先生のお話では徴兵の話に興味を持ちました。徴兵検査というと国民皆兵時代に病気など、兵務に堪えない人を振り落すイメージが強いですが、明治九年の史料では合格者の中から抽籤で常備兵を決めていたことなど、戦前にも大きな時代差のあったことを感じました。

また、日清戦争時の兵士の送迎は全村あげての行事で、学校も午後から休校になるなど、当時の村の様子を色や音が聞こえてくるようなリアルさで史料は物語ってくれています。

最終日の加藤清志先生のお話では、明治になって地租の設定に伴い、江戸時代は適当だった入会地をどうするか、境界の確定に翻弄される村々の姿が見えてきます。確定しなければ国有地となってしまうからです。私の住所は富戸番地で枝番がついています。明治十二年、四カ村の協定で、先原の秣場山がとりあえず富戸村の所有になったとのことでした。史料は、今でも生きていると感じています。

伊東市史編さん事業 刊行書一覧 －好評頒布中－

●伊東市史 ★5,000円、☆2,000円

『伊東市史 史料編　古代・中世』★（B5版函入 縦組918頁・口絵カラー図版55点）
――伊東・宇佐美を名字の地として活躍した武士団伊東氏と宇佐美氏の残した史料を全国的視野で集成！

『伊東市史 史料編　近世Ⅰ』★（B5版函入 縦組822頁・口絵カラー図版6点）
――江戸との強い経済的なつながりを示す伊東の古文書544点を精選して活字化！

『伊東市史 史料編　近世Ⅱ』★（B5版函入 縦組808頁・口絵カラー図版18点）
――伊東市域16カ村の村社会、往き来する旅人の姿や幕末の伊東を捉える文書群を精選して活字化！

『伊東市史 別編　伊東の自然と災害』☆（B5版 縦組446頁・うち66頁カラー）
――伊東の大地の形成と自然、繰り返された災害の歴史に焦点をあてた初の通史！

『図説 伊東の歴史』☆（第二刷、オールカラー・A4版 縦組268頁）
――複雑多岐な伊東の歴史を原始から現代まで鮮明な写真と図表で再現し、わかりやすく解説！

『伊東市史　史料編　近現代Ⅰ』★ 最新刊！（B5版函入 縦組792頁・口絵カラー図版29点）
――16カ村の分立から伊東市域に展開した宇佐美村・伊東町・小室村・対島村の1町3村の史料群を集成！

最新刊の『伊東の自然』

●伊東市史調査報告 各2,000円

第1集『伊東市の棟札』寺社に秘蔵される棟札の市内悉皆調査記録。宗教史・職人史料の宝庫。
第2集『伊東市の石造文化財』中世石塔・近世墓石・路傍の石仏の悉皆調査。近世墓石の増減グラフに注目！
第3集『伊東市の民俗』初めて行われた伊東市の民俗総合調査記録。

●伊東市史研究『伊東の今・昔』 各1,000円（※創刊号、2号は品切れ）

創刊号 品切れ
講演録「海からみた伊東」　網野善彦
「火山がつくった伊東の大地と自然」　小山真人
「伊東氏由緒の形成」　盛本昌広
「江戸時代伊豆東海岸の交通」　加藤清志
「子供の守護神としての伊豆の道祖神」　木村　博
「古文書と私」　星野和子

第2号 品切れ
講演録「伊東一族の五百年」　山田邦明
「伊東市川奈姥子窟の考古学的調査」　坂詰秀一・上野恵司・金子浩之
「成長儀礼の歴史と民俗」　吉川祐子
「関東大震災に宇佐美の児童はいかに対応したか」　笹本正治
「津波歴史データ集積の重要性」　今村文彦

第3号
講演録「伊東の歴史と文化をどう生かすか」　笹本正治
「伊東と『曽我物語』」　坂井孝一
「元禄地震における伊東での被害と人々の行動」　西山昭仁
「伊東の近代建築とその背景」　建部恭宣
「海の村を建設する―戦時期『海の村』の分析―」　小川徹太郎

第4号
講演録「考古学からみた伊東の歴史」　坂詰秀一
「戦国時代の伊東」　盛本昌広
「近世伊豆国伊東地域における山林利用について」　田上　繁
「近代漁業税の形成とその賦課動向」　佐々木哲也
「鎌田城跡発掘調査概要報告」　考古史料部会

第5号
講演録「源頼朝一族と伊豆」　山本幸司
「明治・大正期静岡県会の漁業税争点と増税反対運動」　佐々木哲也
「大室山をめぐる民俗」　民俗部会

第6号
講演録「海と職人の歴史」　神野善治
「近世伊豆における海村の展開」　泉　雅博
「沢田林、沢田についての考察」　佐藤陸郎
『三団体事件』を考える」　渡辺秀夫

第7号
講演録「江戸時代の伊東―伊東湊が結びつけるもの―」　田上　繁
「伊東市朝日山経塚の基礎的研究」　時枝　務
「戦国期仁杉氏の動向」　盛本昌広
「旅人・温泉・村・身分―近世伊東の村落社会―（上）」　関口博巨

第8号
講演録「明治・大正期の伊東―市民が綴った地誌を読み解く―」　羽賀祥二
「旅人・温泉・村・身分―（下）」　関口博巨
「近代伊東のかつお節考―伊東水産製造業の史料的検討―」　佐々木哲也
「吉田砲台の実測調査」　金子浩之

第9号
講演録「伊東・宇佐美氏の歴史と戦国時代の伊東」　盛本昌広
「近代の伊東における大火と地域の対応」　矢島有希彦
『別荘地伊東』と若槻礼次郎」　小宮一夫
「海軍通信学校及び電測学校宇佐美演習所防空壕の発掘調査」　金子浩之

第10号
講演録「繰り返される地震津波被害の実態と教訓」　今村文彦
「『大日本帝国の村』とデモクラシー―役場文書から読み解く大正期の小室村の生活―」　加藤好一
「伊東市史の地元文書史料収集の経過」　加藤清志
「宇佐美遺跡検出の津波堆積物と明応四年地震・津波の再評価」　金子浩之

●伊東市史叢書 1~5集1,000円（※1,2,4集は品切れ）

第1集『伊東の歴史と民俗寸描―地元新聞紙上にみる伊東の姿―』 品切れ
第2集『伊東における狩野川台風の記録』 品切れ
第3集『伊東温泉のうつりかわり―江戸時代から現代までの資料―』
第4集『伊東の文化財』 品切れ
第5集『伊東の学校の歴史』
第6集『伊東の自然』 最新刊！ 1,600円オールカラー300頁

申し込み・問い合わせ

伊東市史編さん事業刊行図書は、伊東市内各書店及び伊東市役所5階の教育委員会生涯学習課窓口にて実費頒布しています。市外からの申し込みは、電話0557-32-1962（生涯学習課市史編さん担当）へお願いします。